

# 石畳参道を復活し地域おこし

## 景観整備

南陽市宮内・熊野振興会

遠藤東一朗



毎年七月二十四、二十五日は、南陽市宮内の熊野大社の例大祭。神輿や獅子の渡御に参加する行者（地元の若者）も数多く、夜祭りには参拝に訪れる人波で参道が埋まっていた。出店も連なり、まさに宮内地区が祭り一色で、まち全体が活気でみなぎっている、そんな感じがしたものだ。

それがいつの頃からか、徐々に祭りの活気が失われていくとともに、まちの活気も失われていった。このまちに以前の活気を取り戻すために私たちの活動は始まった。

宮内地区は、北条郷と称され、東北の伊勢といわれる熊野大社を中心とした門前町として、人々の信仰や生活とかがわりが深く、近郷近在からの参拝客で賑わった。また、上杉鷹山による養蚕の奨励がなされ、古くから養蚕が盛んとなり、隣接地区とともに明治後期より製糸業が発展し、大正、昭和とますます盛んとなり製糸の町として一世を風靡した。

また、近くで鉱山の開発もあり、農業・商業・工業が一体となり長く地域経済の中心となっ

てきた。東北最古の歴史をもつ「宮内の菊祭り」も、まちの発展とともに賑やかさを増していった。

しかし、繁栄は永遠ではなく、化学繊維の普及とともに製糸業が衰退、まちの中心産業衰退とともに人口もまちの活気も減退していった。が、ただ指をくわえて見ていたわけではない。まちづくりを進めるため地区でさまざまな役を担っている人たちが集まり、まちづくりのための協議をしてきた。この協議会は地域振興推進協議会や宮内地区まちづくり懇談会と名称、組織の変遷を見ながら、さまざまな方策を模索してきた経緯がある。この間、菊祭りでの仮装パレード、中心地区での七夕まつり、駅前商店街でのフェスティバルなどの取り組みが見られ、熊野大社例大祭でも各地区に子供神輿保存会を組織し、子供たちが参加できる体制整備をするなど一定の成果は上げてきたものの、抜本的な改革には至らなかった。

そんな時、まちの閉塞状態を何とかしなけ

ればならないとの思いをもつ有志で結成したのが「熊野振興会」だった。会員は職種も年齢もさまざまであったが、このまちを何とかしなければならぬとの思いは一つだった。度重なる協議の末出た結論は、やはり熊野大社を中心としたまちづくりで、観光客を呼べるまちづくりとして、昔の石畳の参道を復活させるという夢のようなものだったが、会員それぞれの行動力で実現に向け動き出した。

まずは、まちの合意形成を図るため、地区のまちづくり協議会に積極的に参画し、地区の総意として事業に取り組み同意を取り付けるとともに、直接関係する道路沿いの地区の皆さんにも組織化をしていただき、計画段階から事業に参画できるよう心がけた。行政への働きかけも該当地区からの要望ではなく、宮内地区全体の要望であり、道路沿いの関係者も合意をしている関係からスムーズにことが運んだと考えている。

行政でも地区からの具体的な事業要望という従来に無い形であったため、積極的に事業

を受け止めていただき、総合計画にこの参道計画を盛り込むとともに、平成八年度に山形県の「アメニティー地域づくり推進事業」制度を活用して、地域のシンボル景観作りを目



鳥居を立て替えし、石畳を敷き詰め、電柱を撤去し、スッキリとし儼かな雰囲気を出し出す景観になった熊野神社参道

指した「熊野門前町景観整備報告書」を作成した。

これを基本に取り組まれた「南陽市宮内熊野門前町景観整備事業」は私たちが思い描いたとおりの石畳舗装をはじめ、電柱を裏通りに移転させることによる無電柱化、トイレ・四阿あずまやを含む鳥居広場の整備など、熊野大社の参道にふさわしい景観とすることができた。

また、この参道に立つ鳥居は、建立から百年以上経過するもので、鉄骨による補強によって支えられたお世辞にも立派とはいえない代物だったこと、観光バスが通るには幅が狭いことから、この事業の進行に合わせ建て替えることが必要だったが、建て替えるとなると相当の費用がかかることから、熊野大社並びにその総代会も容易に動くことはできなかった。

しかし、私たちの思いは、その重い腰をあげるにも成功した。まもなく総代会を中心とした奉賛会が組織され、地区長会も巻き込んで地区全体の取り組みに発展していった。木の鳥居は百年ほどで建て替えが必要となることから、素材は石造りと決定し、道路の工事にあわせ建立できるよう六千万円の協賛目標に日夜取り組み、見事建立にこぎつけた。

めったに見ることができない鳥居の立て替えも話題づくりに利用し、鳥居の解体も大々的に宣伝して実行、鳥居の柱を利用した絵馬を作成し協賛いただいた地区の方々記念として配布した。

このように、地区の方々の熱意と協力で完成した参道だけに、完成後は道路の清掃やフラワーポットの設置などが地区民のボラン

ティアで行われている。

しかし、道路が完成したことによりすぐに活気が戻るわけではない。この事業をきっかけにし、観光客や地元の方々に対しどんな受け皿を用意できるかにかかっている。その第一歩として多目的売店「にぎわいの館」を設置し、子供たちからお年寄りまで利用できる売店を目指し現在も模索を続けている。

また、この事業をきっかけに再構築された地区のまちづくり協議会を中心に、地区内に散在する蔵にスポットを当て、石畳と蔵をメインとした景観作りに向け動き出している。

景観は金があれば作れるかもしれないが、まちづくりは結局人づくりなのだろうと思う。出来上がった景観を生かすも殺すも次第。完成したことに満足していて活性化は望めない。今後も「双松まちづくり推進協議会」を中心にまちづくりを推進していきたい。

この事業に取り組んだことにより地区民の意識が変わってきたように思える。

## 遠藤 東一郎

昭和23年3月4日、南陽市宮内生まれ。南陽市宮内2524。株式会社大東本店薬局代表取締役、薬剤師。

東京薬科大学卒業。江戸時代から続く薬局の第18代当主。昭和34年に株式会社に改組、置賜地方一円に6店舗。

宮内商工会青年部部長、(社)南陽青年会議所理事長などを歴任。現在、双松まちづくり推進協議会会長、熊野振興会会長、南陽市都市計画審議会会長。